

漁海況年報

平成24年1月1日～12月31日

静岡県水産技術研究所
(電話 054-627-1815)

静岡県水産技術研究所伊豆分場
(電話 0558-22-0835)

[黒潮流路]

図1に黒潮流型の区分を、表1に近年の流型の経過を示した。また、図2には平成24年1～12月の各月前半、後半の代表的な黒潮流路を示した。

平成24年の黒潮流路は、1～2月上旬までは三宅島付近を接岸傾向で流れた。1月下旬には駿河湾に暖水波及があった。2月中旬以降はB、C型となり、4月中旬に一時的にN型となったが、その後は6月中旬までB、C型で推移した。この間、黒潮が三宅島～御蔵島に接岸傾向であったため、遠州灘から伊豆諸島北部にかけて暖水が波及し一部は駿河湾、相模湾に波及した。

6月下旬～11月上旬はN型で推移した。当初は三宅島～八丈島の北を通過していたが、小蛇行の東進に伴い一時的に八丈島付近～八丈島南まで南下した。8～10月は黒潮北縁が三宅島・神津島付近まで接岸し、一時的に相模湾、駿河湾に暖水が波及した。その後、11月中旬～12月はB、C型で推移した。

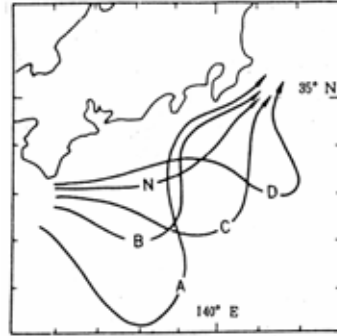


図1 黒潮流型の区分
(海上保安庁海洋情報部より)

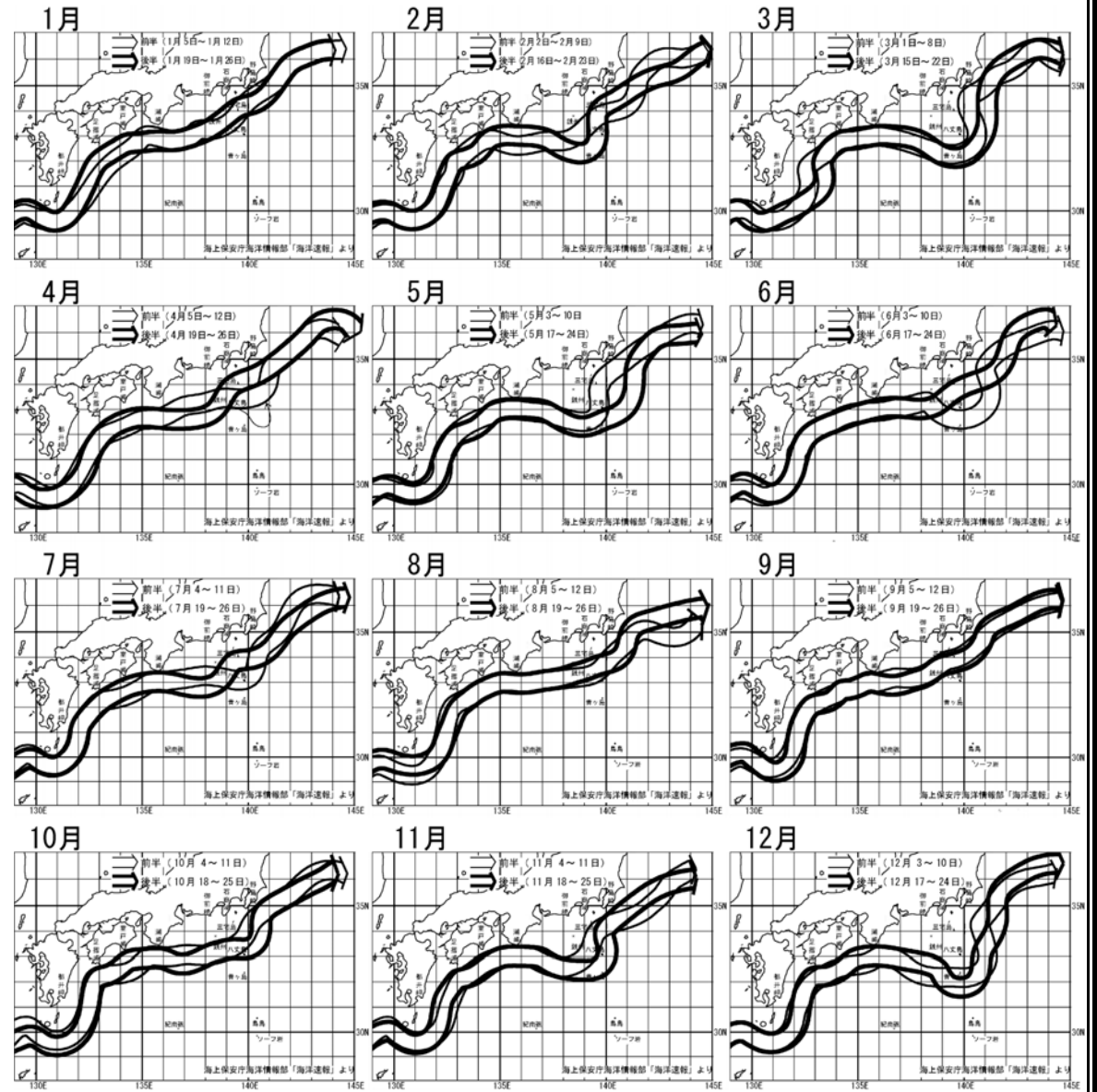


図2 黒潮流軸の変動(海上保安庁海洋情報部「海洋速報」より) 前半月 後半

表1 黒潮流型一覧表

年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月				
平成元	B	C	C	C	DW	C	N	N	N	N	N	DN	B	A	A	A
2年	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	AC	C	C	C	CD
3年	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	D	NN	N	N	N
4年	C	DC	N	N	N	N	BD	C	DN	N	N	N	N	NC	C	N
5年	N	N	N	N	N	B	B	BC	C	C	C	C	C	N	B	C
6年	B	C	D	N	N	N	C	C	NN	N	N	N	B	BN	N	N
7年	N	N	N	N	N	N	B	B	C	C	D	D	NN	N	N	N
8年	C	D	D	D	W	D	N	N	N	N	N	N	N	N	N	B
9年	N	D	D	D	C	C	C	CW	D	ND	N	D	C	CN	D	W
10年	D	C	N	N	D	N	NW	N	N	N	NB	B	B	C	C	C
11年	C	W	WB	C	C	C	C	C	N	N	N	N	N	N	BN	B
12年	C	C	CW	W	W	WB	B	BC	CW	WB	C	C	C	C	C	C
13年	C	C	C	C	CD	C	C	C	WN	B	C	C	C	C	C	WB
14年	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N
15年	N	N	N	N	N	N	D	NW	WN	B	BC	D	N	N	N	N
16年	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	NA	A	A	A	A	A
17年	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	C	C	C	C	C	D
18年	N	N	N	NB	C	CW	CN	N	N	N	N	N	N	N	BN	C
19年	N	BC	D	B	B	C	C	C	C	C	N	B	C	C	C	W
20年	C	C	N	N	N	N	N	B	B	C	C	C	C	CD	C	C
21年	C	C	C	C	C	C	CW	WB	C	C	C	C	C	CW	WC	C
22年	D	DN	N	BC	N	NW	WB	C	CD	D	N	N	NB	B	BN	N
23年	N	N	N	B	B	CW	C	DW	N	BC	C	DN	N	NB	BN	N
24年	N	N	N	B	C	C	CD	N	B	C	C	DN	N	N	N	N

* 静岡県水産技術研究所一部改変

[県下沿岸域]

図3に平成24年1~12月の旬別の沿岸水温の変化を示した。1月の定地水温は、「**平年並~やや高め**」で経過したが、下旬には暖水波及により駿河湾で「**やや高め~かなり高め**」となった。2月上旬は、概ね「**やや低め~やや高め**」であった。中旬以降は暖水波及により全般に「**平年並み~高め**」で経過した。3月下旬は全域で「**やや低め**」~「**低め**」となったが、その後4月下旬~5月中旬は暖水波及により「**高め**」となった。5月下旬~7月下旬は、「**平年並**」~「**やや高め**」、8月上旬~10月中旬は、暖水波及の影響により高めで推移し、一時的に「**やや高め**」~「**きわめて高め**」となった。その後、10月下旬~11月上旬は「**平年並み**」~「**やや高め**」となり、その後12月下旬までは「**平年並み**」~「**やや低め**」で推移した。

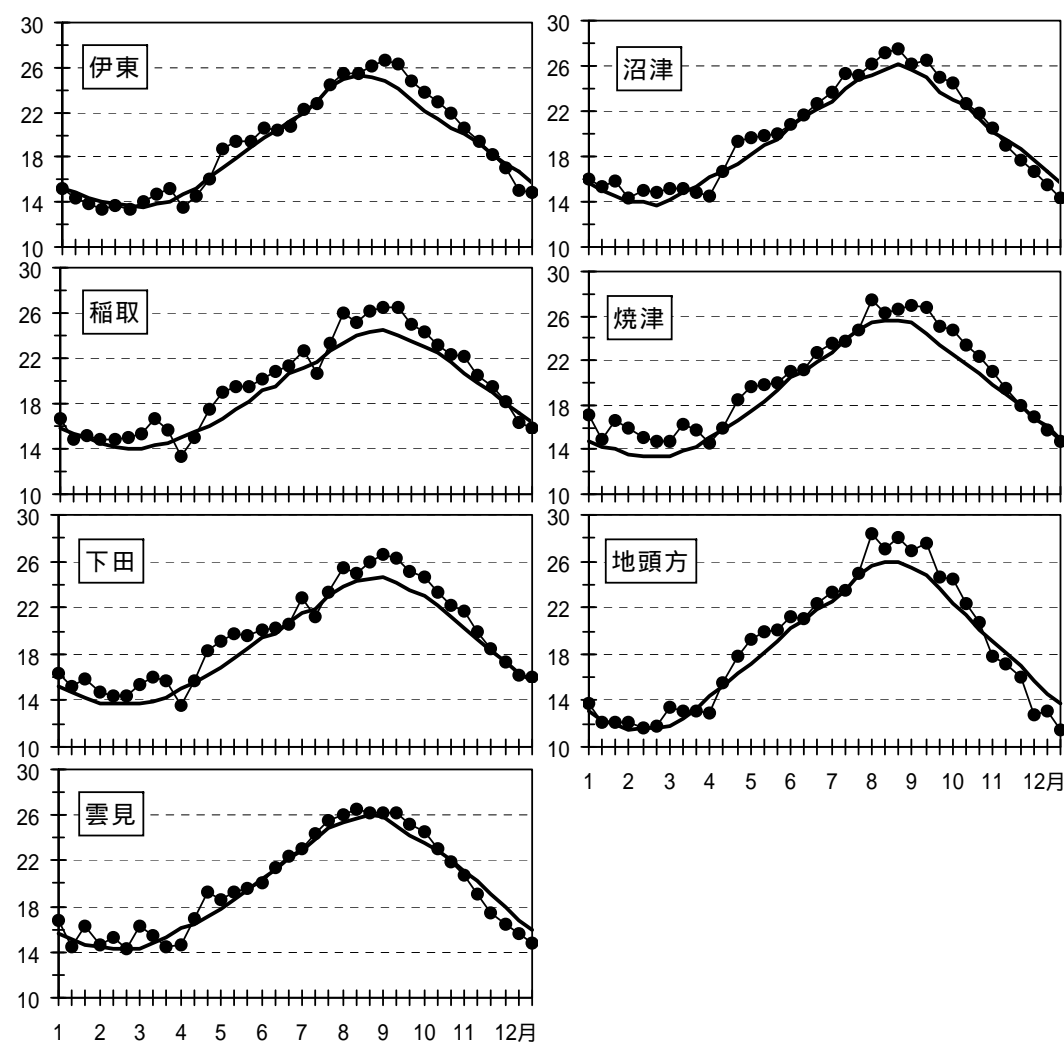


図3 平成24年1~12月の旬別沿岸水温の変化
(縦軸は水温、横軸は月を示す)

[サバたもすくい棒受網]

1 たもすくい

平成24年の伊豆諸島海域におけるたもすくい操業は、1月9日に利島でゴマサバを対象に始まった。マサバ対象の操業は、1月28日に暖水波及によって海面水温が19℃台になっていたひょうたん瀬で始まった。一夜一隻平均漁獲量は、マサバ12.5t(前年9.0t)で前年を上回り、ゴマサバ2.8t(前年6.1t)で前年を下回った。

2月から5月にかけて、たもすくいはマサバ主体の操業が続き、3月中旬までは概ねひょうたん瀬に漁場が形成された。特に2月中旬から3月上旬の漁況は好調であった。また、3月1日と3月3日には銭洲で操業した。その後、3月中旬から4月上旬までの間、大室出しや三本で操業したが、低調に終わった。これは、16前後の冷水域に覆われたことによると考えられる。しかし、4月中旬になるとひょうたん瀬、三本で今季最大の漁模様となった。これは、黒潮流型がC型からD型を経てN型になり、伊豆諸島海域の水温が上昇したことによる。4月下旬から5月までの漁場は概ね大室出しであり、5月中旬以降、徐々にマサバに対するゴマサバの比率が増加した。6月以降、マサバのまとまった漁獲は見られなくなり、ゴマサバ主体に三本、大室出し、ひょうたん瀬で操業をした。

マサバは尾叉長30~40cmの群が漁獲の主体となり、モードは33~35cmに見られた。また、30cm未満の小型魚や43cm以上の大型魚も、僅かに漁獲された(図1)。推定した年齢別漁獲尾数によれば、卓越年級群である2004年級群に次ぐ加入水準とされる3歳魚^{*1}(2009年級群)のほか4歳魚(2008年級群)2歳魚(2010年級群)が漁獲の主体となった。1歳魚(2011年級群)の割合は、過去10カ年では7番目の水準であり、あまり高くなかった。

ゴマサバは尾叉長25~38cmの群が漁獲の主体となり、モードは31~32cmに見られた(図1)。推定した年齢別漁獲尾数によれば、卓越年級群である2004年級群に次ぐ加入水準とされる3歳魚(2009年級群)と、比較的高い加入水準とされる2歳魚(2010年級群)が漁獲の主体となった。

平成24年1~6月の千葉県・神奈川県・静岡県主要7港^{*2}におけるたもすくい水揚量は、マサバが2,145トンで前年(2,158トン)の99%、ゴマサバが471トンで前年(1,471トン)の32%であった。特にマサバについては、期間中の1日1隻あたり水揚量が12.5トンで前年(9.0トン)を上回った。

*1 年齢は1月に加齢し、平成24年(2012年)時のものを示した。

*2 千倉・富浦(千葉県) 三崎・長井(神奈川県) 伊東・沼津・小川(静岡県)の7港。

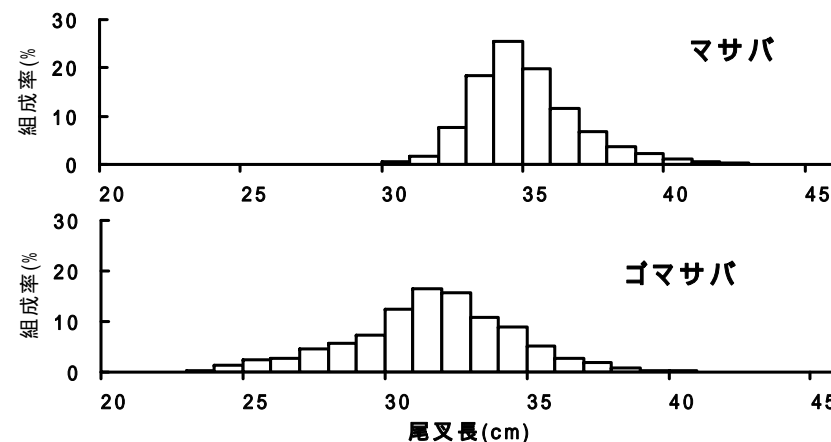


図4 平成24年1~6月のたもすくいによるマサバ尾叉長組成(上)とゴマサバ尾叉長組成(下)

2 棒受網

伊豆諸島海域における棒受網操業は、1月10日から始まった。静岡県棒受網船は、ほぼ年を通じて三本、三宅など三宅島周辺海域でゴマサバ主体の操業を行ったが、3月上中旬はひょうたん瀬、4月中旬は銭洲、5月中旬には銭洲、神津島へ出漁した。また、2月1日～2月23日の間と3月上中旬の2日間はマサバ狙いでたもすくい操業へ転換し、ひょうたん瀬、銭洲に出漁した。静岡県主要4港*³における棒受網(一部たもすくいも含み、以下同じ。)の1日1席あたりゴマサバ水揚量は21.4トンで、前年(20.8トン)の103%であった。

漁獲されたゴマサバについての1～6月の尾叉長範囲はたもすくいと併せて23～40cmであった。の月別モードについて、1月は30～31cm、2月は32cm、3月は30cm、4月は32cm、5月は26cm、6月は28cmであった。7～11月の尾叉長範囲は21～42cmであった。月別モードについて、7月は28～29cm、8月は24～25cmと28～29cm、9月は28～29cm、10～11月は24～26cmと28～29cmであった。年間の年齢別漁獲尾数は、0歳魚(2012年級群)が15%、1歳魚(2011年級群)が51%、2歳魚(2010年級群)が18%、3歳魚(2009年級群)以上は16%であり、1歳魚(2011年級群)が漁獲の主体となった。

静岡県主要4港における棒受網の水揚量は、マサバが2～5月を中心に1,156トンで前年(1,355トン)の85%、ゴマサバが8,140トンで前年(10,709トン)の76%であった。ゴマサバ水揚量が前年を下回った理由として、漁期後半に大型低気圧等の影響で出漁日数が伸び悩んでしまったことが考えられる。

*3 伊東、静岡、沼津、小川の4港。

3 小川港におけるサバ類単価

小川港における棒受網(一部たもすくいも含む)のサバ類月別単価は、マサバが103～271円/kg(1～5月)、ゴマサバが46～62円/kgであった。水揚の主体となったゴマサバについては、年明けは前年を下回る傾向であったものの、年後半では前年を上回りながら推移した。

表2 小川港(焼津市)における棒受網・たもすくいのサバ類月別単価(円/kg)

年	魚種	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平成18年 (2006年)	マサバ	-	-	64	118	61	-	-	-	-	-	72	56
	ゴマサバ	52	48	53	68	43	60	62	40	38	49	49	41
平成19年 (2007年)	マサバ	129	236	185	156	124	140	184	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	50	53	51	71	72	57	74	60	58	63	80	95
平成20年 (2008年)	マサバ	-	315	489	315	173	-	-	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	98	96	92	83	78	90	72	61	51	48	56	58
平成21年 (2009年)	マサバ	-	486	405	169	108	-	-	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	53	75	56	56	56	56	54	50	38	36	36	37
平成22年 (2010年)	マサバ	35	249	260	126	231	253	204	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	71	61	79	63	63	66	57	42	36	39	37	39
平成23年 (2011年)	マサバ	-	216	225	169	280	450	-	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	48	54	58	62	62	58	56	51	54	54	53	48
平成24年 (2012年)	マサバ	271	138	263	172	103	-	-	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	52	46	51	51	46	52	62	59	59	56	58	59

[サクラエビ船曳網]

春漁は4月2日夜～6月7日夜(漁期は4/1～6/8)にかけて操業が行われた。出漁日数は22日、漁獲量は945トンで、漁場は主に田子の浦～三保沖及び焼津～相良沖に形成された(前年の出漁日数は13日、漁獲量は721トン)。漁獲されたサクラエビは、平均体長36.3mmの当歳エビ(前年は36.9mm)と平均体長42.1mmの1歳エビ(前年も同じく42.1mm)で、当歳エビが主体であった。

秋漁は10月29日夜～12月21日夜(漁期は10/29～12/21)にかけて操業が行われた。出漁日数は17日、漁獲量は389トンで、漁場は主に三保～相良沖及び戸田沖に形成された(前年の出漁日数は13日、漁獲量は358トン)。漁獲されたサクラエビは、平均体長31.0mmの当歳エビ(前年は32.9mm)と平均体長39.5mmの1歳エビ(前年は40.6mm)であった。

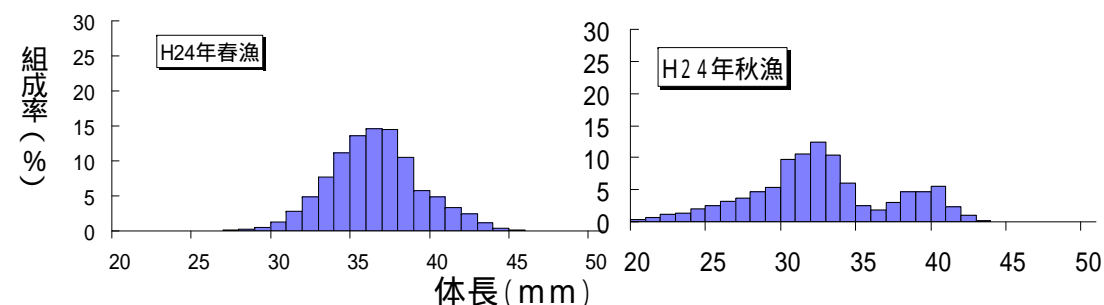


図5 平成24年春・秋漁のサクラエビ体長組成

[竿釣近海カツオ]

・水揚量と魚価

・水揚量と魚価

静岡県主要5港(沼津、清水、焼津、小川、御前崎)における近海・沿岸竿釣り船の水揚量は、1,373トンで平成23年の2,570トンを下回り、過去5か年平均(1,873トン)の73%であった。魚価は467円/kgで平成23年の398円/kgを上回った。

・漁況(漁場形成と魚体)

近海竿釣り船のQRY、御前崎港での市場調査による小笠原と伊豆諸島周辺の漁況はおおむね下記のとおり推移した。

- 1月 小笠原諸島周辺でカツオを漁獲し、1月27日に水揚げされたカツオは小・極小(尾叉長43cm)特大(尾叉長66cm)にモードがあった。
- 2月 小笠原諸島周辺で特大(尾叉長69cmモード)と大・中(尾叉長58cmモード)、特大(尾叉長76cmモード)、極小(尾叉長41cmモード)カツオを漁獲した。
- 3月 小笠原諸島周辺で中・大(尾叉長57cmモード)、極小・小(尾叉長42cmモード)カツオを漁獲した。
- 4月 30°～33°N、135°～139°Eで大・中(尾叉長59cmモード)カツオを主体に漁獲した。
- 5月 28°～34°N、139°～144°Eで小・極小(尾叉長43cmモード)カツオを主体に漁獲した。
- 6月 31°～34°N、138°～140°Eのスミス島から三宅島にかけて小・極小(尾叉長44cm

モード) チン(尾叉長 37cm モード) カツオを漁獲した。
 7 月 30° 30' ~34° N, 137° ~140° 20' E の三宅島から鳥島周辺にかけて小(尾叉長 44cm モード)を主体に極小、チン(尾叉長 38cm モード)カツオを漁獲した。
 8 月 31° ~33° N, 139° ~140° E の八丈島からハコースにかけて、小(尾叉長 46cm モード) 極小(41cm モード) チン(37cm モード)カツオを漁獲した。
 9 月 31° ~34° N, 138° ~140° E 付近の伊豆諸島周辺から遠州灘にかけて、小(尾叉長 46cm モード) 極小・チン(尾叉長 38cm モード)カツオを漁獲した。
 10月 33° 30' N, 140° E 付近の新黒瀬等で中(尾叉長 54cm モード) 小(尾叉長 49cm モード) 特特大(尾叉長 75cm モード)カツオを漁獲した。
 11月 23° ~34° N, 139° ~142° E 付近の伊豆諸島から小笠原諸島周辺で極小(尾叉長 41cm モード)カツオを主体に漁獲した。
 12月 水揚げはなかった。

表3 平成 24 年近海釣り船のカツオ水揚量等 (県内主要 5 港)

年月	水揚量 (ト)	水揚隻数	水揚 / 隻 (ト)	平均単価 (円 / kg)	主漁場と魚体(体長cm)
24年 1月	24	3	8.0	363	小笠原諸島周辺(43、66cm)
2月	108	11	9.8	442	小笠原諸島周辺(41、58、69、76cm)
3月	179	18	9.9	549	小笠原諸島周辺(42、57cm)
4月	276	46	6.0	540	伊豆諸島周辺(59cm)
5月	210	61	3.4	470	伊豆・小笠原諸島周辺(43cm)
6月	68	23	3.0	542	スミス島~三宅島(37、44cm)
7月	231	75	3.1	381	三宅島~鳥島(38、44cm)
8月	126	52	2.4	515	八丈島~ハコース(37、41、46cm)
9月	78	37	2.1	294	伊豆諸島周辺~遠州灘(38、46cm)
10月	41	18	2.3	372	新黒瀬等(49、54、75cm)
11月	32	9	3.6	344	伊豆・小笠原諸島周辺(41cm)
12月	0	0	-	-	
24年 計	1,373	353	3.9	467	
23年 計	2,570	400	6.4	398	
5年平均	1,873	414	4.5	419	平成19~23年の平均

【まき網】

1 マイワシ

本年の静浦漁港における総水揚量は0.9 トンで、前年(4.2 トン)の20%、平年(過去5か年平均: 23.0 トン)の4%であった。平年の主漁期は6~7月であるが本年は水揚げがほとんど無かった。

沼津港における総水揚量は1,032.5 トンで、前年(3,751.3 トン)の28%、平年(過去5か年平均: 1,674.5 トン)の62%と低調であった。2~4月と10~11月にまとまった水揚げがあり、総水揚量の96%を占めた。

小川港における総水揚量は423.5 トンで、前年(1,946.3 トン)の21.8%、平年(792.5 トン)の53.4%と低調であった。2~4月と10~11月に比較的多くまとまった水揚げあり、この期間で総水揚量の99%を占めた。2月は被鱗体長20cm 前後の銘柄大羽が主体であったが、11月は被鱗体長16cm 前後の銘柄中羽が主体であった。

伊東港における総水揚量は75.0 トンで、前年(716.0 トン)の11%、平年(727.4 トン)の10%であった。11月に67 トンの水揚げがあったのがピークで、この月で総水揚量の90%を占めた。

2 カタクチイワシ

本年の静浦漁港における総水揚量は419.0 トンで、前年(34.5 トン)の1,215%、平年(480.2 トン)の87%と、前年を大きく上回り、平年を下回った。平年の主漁期は5~6月であるが本年は5月に333 トン、6月に86 トンの水揚げがあったが、それ以外の月の水揚げは無かった。

注) 平年: 過去5か年平均

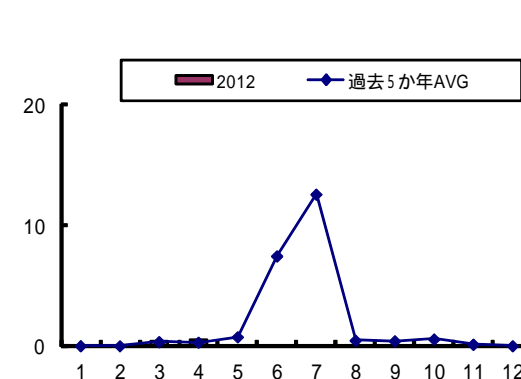


図5 静浦漁港マイワシ月別水揚量の推移

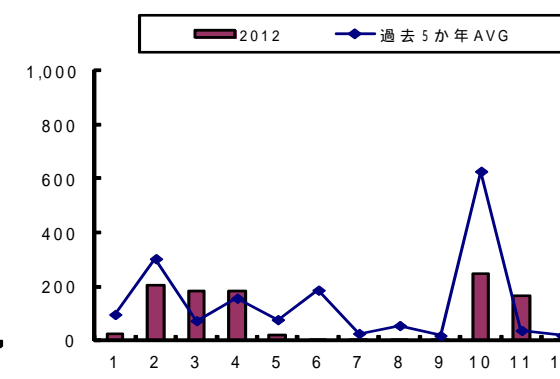


図6 沼津港マイワシ月別水揚量の推移

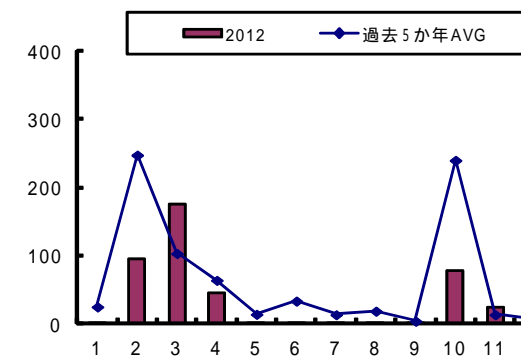


図7 小川港マイワシ月別水揚量の推移

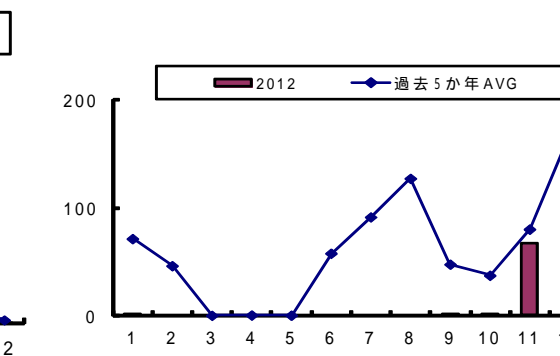
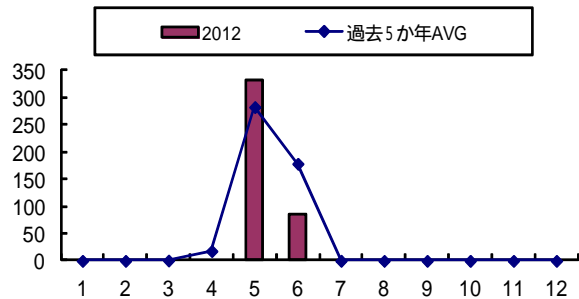


図8 伊東港マイワシ月別水揚量の推移

(注) 図5~8の縦軸は水揚量(トン)、横軸は水揚月



(注) 図9の縦軸は水揚量(トン)、横軸は水揚月

[シラス船曳網]

シラス漁は3月21日から始まった。3~12月の主要6港(静岡、吉田、御前崎、遠州、舞阪、新居)における総水揚量は8,488トンで、前年(8,022トン)の106%、平年(7,204トン)の118%と、前年、平年を上回った。総水揚金額は5,372,434千円で、前年(4,086,019千円)の132%、平年(4,088,233千円)の131%と、前年、平年を上回った。平均単価は633円/kgと前年(509円/kg)の124%、平年(571円/kg)の111%だった。

1日1か統当りの水揚量の推移をみると、3~6月は前年同期、平年同期ともに下回ったが、7月以降は前年、平年ともに上回った。月別にみると、3月は216kg(駿河湾119kg、遠州灘334kg)と平年同期(282kg)の77%、4月は321kg(駿河湾253kg、遠州灘371kg)で平年同期(377kg)の85%、5月は230kg(駿河湾116kg、遠州灘263kg)で平年同期(626kg)の37%、6月は339kg(駿河湾301kg、遠州灘357kg)で平年同期(570kg)の60%であり、特に5月と6月が低かった。また、駿河湾と遠州灘を比較すると、駿河湾より遠州灘の方が高い状態が続いた。7月に入ると好転し、7月は857kg(駿河湾966kg、遠州灘802kg)で平年同期(392kg)の218%、8月は744kg(駿河湾718kg、遠州灘761kg)で平年同期(392kg)の190%に達した。9月は455kg(駿河湾524kg、遠州灘395kg)で平年同期(399kg)の114%、10月は537kg(駿河湾469kg、遠州灘580kg)で平年同期(325kg)の165%、11月は481kg(駿河湾387kg、遠州灘541kg)で平年同期(174kg)の277%、12月は255kg(駿河湾176kg、遠州灘312kg)で平年同期(138kg)の185%であった。特に、8月、10月、11月は主要6港の統計を取り始めた1985年(昭和60年)以来、最高値であった。駿河湾と遠州灘を比較すると、7月と9月は駿河湾の方が高く、それ以外の月は遠州灘の方が高かった。

水揚量の推移をみると、3~6月は前年同期、平年同期ともに下回ったが、7月以降は9月、10月を除き前年、平年ともに上回った(9月は前年、平年ともに、10月は前年のみ下回った)。月別にみると、3月は68トンで平年同期(163トン)の42%、4月は448トンと平年同期(733トン)の61%、5月は357トンで平年同期(1,520トン)の24%、6月は734トンで平年同期(1,202トン)の61%で、特に5月と6月が低かった。7月に入ると好転し、7月は2,593トンで平年同期(848トン)の306%、8月は1,361トンで平年同期(781トン)の174%に達した。9月は742トンで平年同期(872トン)の85%と平年を下回ったが、10月は1,212トンで平年同期(717トン)の169%、11月には740トンで平年同期(269トン)の275%、12月は233トンで平年同期(100トン)の232%と平年を大幅に上回った。なお、11月、12月の水揚量は主要6港の統計を取り始めた1985年(昭和60年)以来、最高値であった。

平均単価の推移をみると、3~6月は平年同期を大幅に上回った(平年同期比120~210%)、その一方で、7月以降は平年同期を下回った(平年同期比56~95%)、3~6月に単価が高騰した要因としては、解禁日から6月下旬までまとまった水揚がなく水揚量が前年、平年を下回ったこと、7月以降に

単価が下回った要因としては7月以降の水揚量が多かったことが考えられる。

今漁期の特徴としては、解禁当初はマシラス主体で経過したこと、6月下旬以降の黒潮系暖水の波及や黒潮内側反流の発達とともにカタクチシラスが主体となり好漁となったこと、5月末までの漁況経過から今漁期は春不調パターンと予測され、7月以降は9月を除き好漁であったことがあげられる。9月下旬以降も断続的に黒潮系暖水の波及や黒潮内側反流があったことも要因となり、秋シラスが好調であった。

注) 平年：過去5か年平均

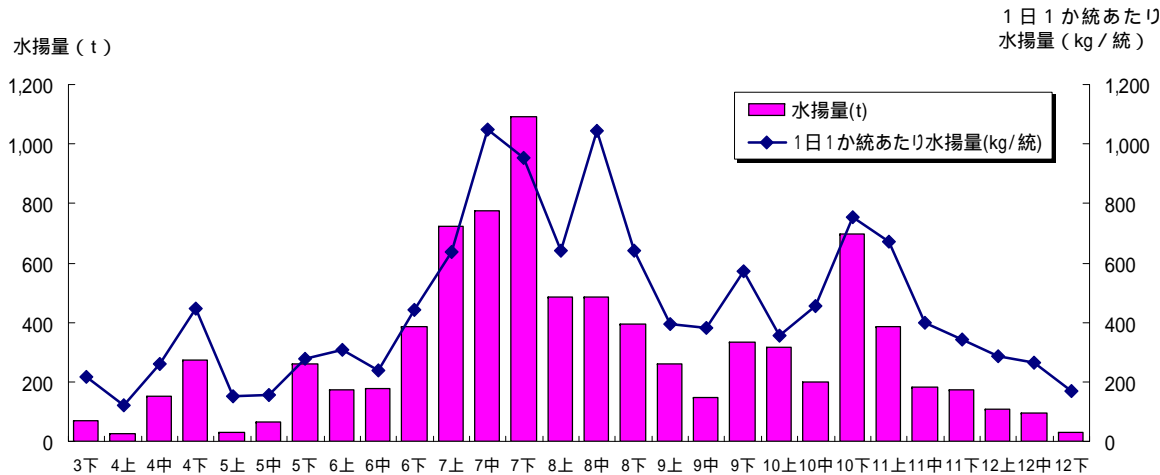


図10 平成24年主要6港旬別シラス水揚量と1日1か統あたり水揚量の推移

[定量網]

伊豆半島東岸大型定置網7か統(伊豆山、古網、川奈、富戸、赤沢、北川、谷津)の漁獲量は6,137トンで、前年漁獲量5,255トンの1.2倍、平年漁獲量(昭和57年~平成23年平均)3,980トンの1.5倍となった。月別の漁獲量では、サバ類などの漁獲に支えられて1月が、マルソウダなどの漁獲に支えられて5月が多く、その他の月でも8~9月を除くと概ね平年を上回る漁獲がみられた(図11)。

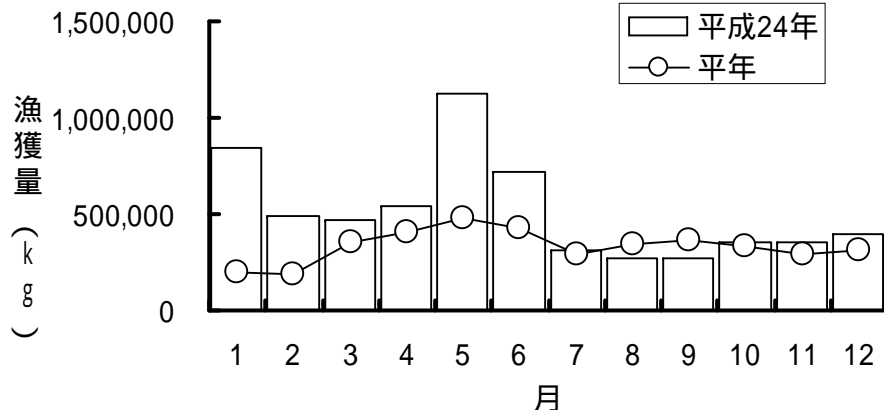


図11 漁獲量の月別推移

魚種別の漁獲量ではサバ類、マルソウダ、ブリ、カタクチイワシ、スルメイカなどが多く漁獲され（表4）中でもサバ類、マルソウダ、ブリ、アカカマスなどが前年および平年を大きく上回り漁獲されたことが特徴の一つであった。

表4 多獲された魚種の漁獲量

魚種	漁獲量(トン)	前年比	平年比
サバ類	2,098.6	1.3	2.4
マルソウダ	1,299.5	2.9	5.7
ブリ	836.5	3.0	4.8
カタクチイワシ	459.5	0.5	1.2
スルメイカ	289.0	0.6	1.6
マアジ	176.5	0.6	0.3
マイワシ	117.7	1.4	0.3
アカカマス	105.8	3.8	4.9

サバ類では2,099トンの漁獲のうち、マサバが50トン（前年比1.2）漁獲され、徐々に増加する傾向がみられた。漁獲されたゴマサバ、マサバは、いずれも1~3歳魚が主体であったため、その大きさは20~40cmと体長幅が大きいものとなった。また、ブリでは、平成21年に発生したブリ（平成24年時3歳魚）および平成23年に発生したイナダ（平成24年時1歳魚）の資源水準が高かったことから好漁となった。一方、例年ならば、漁獲の主体となるマアジは、0、1歳魚（平成23~24年に発生した群）の資源量が少なかったことを反映して前年、平年を下回る漁獲となった。

なお、漁場別では伊豆山、古網、川奈、富戸漁場で前年を上回る漁獲があり、年間の漁獲量では川奈、古網、北川漁場の順に多く漁獲された(図12)。

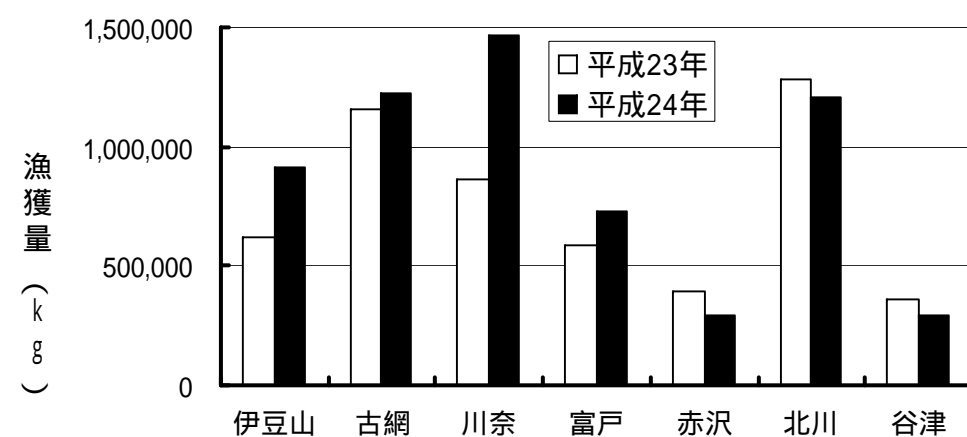


図12 漁場別漁獲量

静岡県水産技術研究所のホームページ

パソコンからは..... <http://fish-exp.pref.shizuoka.jp/>

携帯電話からは..... <http://fish-exp.pref.shizuoka.jp/mobile/>

右のQRコードをご利用ください。人工衛星NOAAによる海面の水温分布画像を見ることができます。

